ンバエ・タンブエの詩 ／ 政治編

花　渕　馨　也
北海道医療大学看護福祉学部・全学教育推進センター

Poémes de Mbaye Trambwe / LA POLITIQUE

Keiya HANABUCHI

本稿は，18～19世紀のコモロ諸島・ンガジジャ島の詩人「ンバエ・タンブエ」(Mbaye Trambwe) の詩の試訳である。ここで取り上げるのは，ンバエ・タンブエの詩集≪MBAYE TRAMBWE : Poèmes, pensées et fragments.≫（Damir ben Ali & Masséande Chami Allaoui. 1990）の５つの章に収録されている30の詩や格言の中から，「政治」(SIYASA/LA POLITIQUE）と題された章におさめられた４つの詩である[1]。ンバエ・タンブエの詩は口頭で伝承されてきたものであり，近年まで文書化されたテキストは存在しなかった。この詩集は，コモロのCNDRS[2]（国立科学文書研究センター）の人類学者Damir ben Ali氏が，1970年代に各地の口頭伝承を収集・録音したものを文書化し，Masséande Chami Allaoui氏とともにフランス語訳した，ンバエ・タンブエの貴重な初作品集である。

ンバエ・タンブエは，18～19世紀のコモロ諸島・ンガジジャ島のスルタンであり，賢者として名高く，多くの詩や格言を残した人物である。ンバエ・タンブエは，1735年に「バンバオ」領（Bambao）領の首都「イコニ」(Ikoni）の「カヴィリジェオ」(Kapviridjeo）王宮で生まれ，1815年に80歳で亡くなった。ンバエ・タンブエの本名は，「タンブエ・ムラナオ」(Trambwe Mlanao）であるが，「祖父」や「老賢者」を意味する「ンバエ」(Mbaye）という通称で知られている。人間，運命，政治や道徳など様々なテーマについての深い洞察に満ちた彼の言葉は，現在でも社会生活のさまざまな場面で引用され，コモロの人々によって語り継がれている。

ンバエ・タンブエが生まれた18世紀のンガジジャ島では，「ヒニャ」[3]（hinya）と呼ばれる複数の母系氏族が「スルタン」(mfaume）王朝を築き，11のスルタン領を統治していた（地図参照）[4]。全てのスルタン領の頂点には最高位である「ンティベ」(Ntibe）という称号があり，この地位をめぐり，領土が隣り合う二つの有力な王朝，バンバオ領の「ヒニャ・マツワ・ピルサ」(Hinya Matswa Pirusa）氏族と，「イツァンドラ」(Itsandra）領の「ヒニャ・フワンバヤ」(Hinya Fwambaya）氏族が対立しあっていた。ンバエ・タンブエは，この二つの氏族の出自をもつ両親のあいだに生まれた。

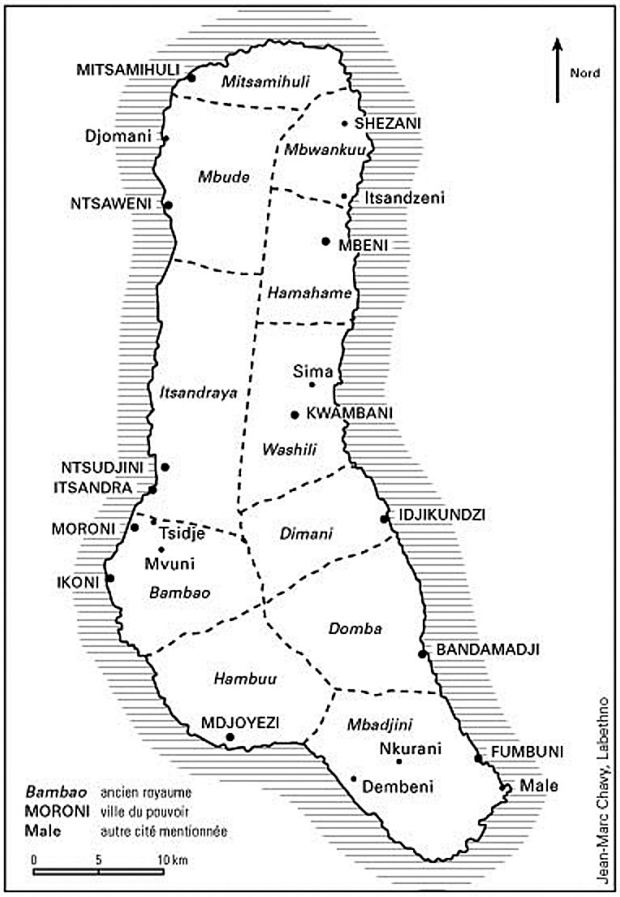
---

[1] 本の構成は，１章＜SIYASA/LA POLITIQUE＞（政治），２章＜WUTUMI/LE TRAVAIL＞（仕事），３章＜MAYESHA YA SITARA NA SHEWO/LA VIE EN SOCIETE＞（社会生活），４章＜IMANI/LA FOI＞（信仰），５章＜WUDUHAZI NO HUFA/LA VIEILLESSE ET LA MORT＞（老いと死），および注釈からなる。

[2] CNDRS : Centre National de Documentation et de Recherche Scientifique.

[3] 「イニャ」(inya）と呼ばれることもある。ヒニャとは，ペルシアのシーラージやアラビア半島のハドラマウトなどから渡来したそれぞれ異なる起源伝承をもつ母系クラン（氏族）であり，コモロ諸島の中でもンガジジャ島のみに存在する。コモロ社会は母系制社会であり，母系出自集団が基盤となっており，不動産の母系相続や，妻方居住婚の慣習的規則がある。

[4] 以下の歴史に関する記述は，Damir（1984），Damir & Masséande（1990），Walker（2019），Said Ahmed（2000）に基づいている。



地図：18世紀のスルタン領（出典：Blanchy 2003）

ンバエ・タンブエの母親の「マジャム」(Mmadjamu wa mdombozi）は，ヒニャ・フワンバヤ氏族に属し，「ワシリ」(Washili）領の首都「クワンバニ」(Kwambani）で生まれた。マジャムは，イツァンドラ領の「ンツジニ」(Ntsudjini）にある「ンティベのモスク」(Msihiri wa Ntibe[1]）でイスラームの法学書“Minhadj al Twalibin”[2]を説いた有名な神学者であり，また詩人でもあった[3]。

マジャムの母親は，ヒニャ・フワンバヤの始祖であり，イツァンドラ領の最初の女性スルタンとなった「ワベジャ」(Wabedja Seha la Djumbe）である。18世紀初頭，ヒニャ・フワンバヤ王朝は男性の後継者がいなかったため，ワベジャがイツァンドラ領のンツジニにある「シンガニ」(Singani）王宮でスルタンの地位についた。ワベジャには３人の息子がおり，順番にスルタンとなったが，みな長生きせず，息子たちがすべて亡くなるとワベジャは再びスルタンに復位し，その後，半世紀近くものあいだイツァンドラ領を統治した。

[1] 15世紀に，ンツジニの村を築いたスルタン「カンズのンティベ」(Ntibe wa Kandzu）が建立したとされるモスク。
[2] “Minhāj al–ṭālibīn wa–ʿumdat al–muftīn”(『学生の道』）は，13世紀のシリアの法学者ナワウィー（Abu Zakaria Yahya Ibn Sharaf al–Nawawī : 1233–1277）によって書かれた，イスラーム・スンナ派・シャーフィーイ学派の法典の一つであり，コモロのイスラーム法の基礎になっている。
[3] ンバエ・タンブエがスルタンに即位した時に母親マジャムが読んだ詩などが，現在でも語り継がれている。

ワベジャは政略に長けており，同盟を結ぶために，自分の娘たちを有力な氏族であるヒニャ・マツワ・ピルサ氏族の男性と結婚させた。長女「ネマ・フェダ」(Nema Feda）は北端の「ミツァミフリ」(Mitsamihuli）領のスルタンである「タンバヴ」(Trambavu）の妻となり，後に「ハマハメ」(Hamahame）領の女性スルタンの座についた。

マジャムは，ンガジジャ島南端の「ンバジニ」(Mbadjini）領の王子「タンバヴ」(Trambavu[1]）と最初の結婚をして，２人の子供をもうけた。しかし，その後タンバヴがンバジニ領の首都「フンブニ」(Fumbuni）の王座から，妻マジャムの父である「ムサフム・ビン・マハメ」(Msafumu bin Mahame）を追い出したため，マジャムはタンバヴと離婚した。マジャムはイコニに戻り，ヒニャ・マツワ・ピルサ氏族に属す，いとこの「ムラナウ」(Mlanau）と結婚し，ンバエ・タンブエと２人の娘をもうけた。

マジャムと最初の夫タンバヴの長男「フムナウ」(Fumnau）は，1743年に祖母のワベジャからイツァンドラ領のスルタンの座を譲り受け，その後，義理の父であるムラナウの死後にはンティベの称号を継いだ。長女「マワディナ・ムウィニ」(Mmawadina Mwinyi）はムラナウの甥「ナウ」（Nau）と結婚した。

ンバエ・タンブエの父親ムラナウは，イコニ出身で，バンバオ領のスルタンであり，ンガジジャ島のンティベであった[2]。ンバエ・タンブエの父方のヒニャ・マツワ・ピルサ氏族と母方のヒニャ・フワンバヤ氏族の二つの氏族は，18世紀までに，それぞれ婚姻や外交による同盟関係をンガジジャ島各地のスルタンと結び，互いに勢力を広げていた。ヒニャ・マツワ・ピルサ氏族はバンバオ領を統治し，ミツァミフリ領，「ハンブ」(Hambu）領，「ンブワンク」(Mbwankuu）領，「ンブデ」（Mbude）領と同盟し，支配下においていた。ヒニャ・フワンバヤ氏族はイツァンドラ領を統治し，ワシリ領，ハマハメ領，「ディマニ」(Dimani）領と同盟し，支配下においていた。さらに，もう一つの有力な氏族であり「ヒニャ・ンドンボジ」(Hinya M'Dombozi）氏族は，ンバジニ領を統治し，「ドンバ」(Domba）領のスルタンと同盟していた。

ヒニャ・マツワ・ピルサ氏族とヒニャ・フワンバヤ氏族は，このような勢力関係の中で，ンティベの称号をめぐり対立していたが，イツァンドラのスルタンであったワベジャがマジャムをヒニャ・マツワ・ピルサ氏族に嫁がせたので，婚姻により姻戚関係にあった二つの氏族の関係は，18世紀半ばまで比較的平和を保っていた。しかし，ワベジャの孫のフムナウがスルタンとなった頃から，ンブワンク領やワシリ領などの領土支配をめぐり両氏族は対立し，たびたび戦争を起こすようになった。

甥であるフムナウの即位に対し不満をもったハマハメの女性スルタンであるネマ・フェダは，ンツジニに攻撃を仕掛けたが，バンバオとイツァンドラの合同軍に敗れた。この争いの後，ヒニャ・マツワ・ピルサ氏族とヒニャ・フワンバヤ氏族の同盟はゆらぎはじめ，その後，ハンブ領やワシリ領をめぐる戦争により完全に崩壊した。

ハンブ領をめぐっては，ンバエ・タンブエの父ムラナウが，「ヒニャ・ンバンバ・ムドォ」(Hinya Mbamba mdro）氏族からスルタンの座を奪い，ヒニャ・マツワ・ピルサ氏族の自身の甥であるナウをスルタンに就任させた。ナウはヒニャ・フワンバヤ氏族であるマジャムの娘マワディナ・ムウィニと結婚しており，妻の氏族と姻族関係にあったが，ヒニャ・フワンバヤ氏族のスルタンたちは，ハンブ領がヒニャ・マツワ・ピルサ氏族に奪われたとして憤慨し，両氏族の対立が深まった。

やがて両氏族の争いはワシリ領をめぐる大きな戦争へと発展した。1760年代，ワシリ領のヒニ

[1] 姉のネマ・フェダの夫と同名だが別人。
[2] この時代，ムラナウは 隣の「ムワリ島」(Mwali）も統治していた。

ャ・フワンバヤ氏族の王朝は後継者がおらず消滅の危機を迎えており，その継承をめぐり二つの氏族が対立するようになった。ンバエ・タンブエの母マジャムは，夫と息子の争いを止めようとしたがかなわず，長い戦争がはじまった。まず，ヒニャ・マツワ・ピルサ氏族に属す，ミツァミフリ領のスルタンで，ネマ・フェダの夫のタンバヴがイツァンドラ領に侵攻したが，その先発隊はハマハメ領の首都「ンベニ」(Mbeni）の丘で，フムナウ率いるイツァンドラ軍に壊滅させられた。これに対し，バンバオ領のスルタンであるムラナウはワシリに軍隊を派遣し，南側と海岸部を占領した。フムナウは後退し，ワシリの北部と首都クワンバニを占領した。その後，戦争は7年間つづき，ワシリ領は荒廃した。バンバオの最も勇猛な二人の兵士が待ち伏せにより殺害されたことを聞いたムラナウは闘いをあきらめ，ワシリ領から退却し，イコニに戻った[1]。

戦争は，フムナウがワシリを占領し，勝利をおさめたのだが，ヒニャ・フワンバヤ氏族に属す男子の中で，唯一政治ををつかさどることができる年齢であったのが，フムナウの異母兄弟で，敗者となったムラナウの息子ンバエ・タンブエであった。結局，ンバエ・タンブエがワシリのスルタンとなり，その後，ワシリは平和と繁栄の時代を迎えたとされている。

ンバエ・タンブエは何人もの王族の女性と結婚し，たくさんの子供をもうけ，その息子たちのうち，ヒニャ・フワンバヤ氏族の「シマイ・タンブエ」(Simayi Trambwe）がンベニ領を，「ヒニャ・ンドンボジ」(Hinya mdombozi）氏族の「スジャウマ・タンブエ」(SudjaumaTrambwe）がンバジニ領を，ヒニャ・マツワ・ピルサ氏族の「ムサフム・タンブエ」(Msafumu Trambwe）はミツァミフリ領をそれぞれ統治した[2]。また，父親のフムナウから地位を引き継いだイツァンドラ領のスルタンである甥の「フェ・フム」(Fe Fumu wa Fumnau）がンティベの称号を継承した。

ンバエ・タンブエはワシリ領のスルタンとして，息子や孫が統治するスルタン領のあいだの友好関係を維持するよう努めた。また，多くのモスクを建立し，「ミツァミフリ・ムジニ」(Mitsamihuli–mdjini）のモスクなど，今日でも彼の名前のついたモスクが各地に残っている。晩年には，自分で動けないほどに太りすぎ，近い家臣と妻とともに地方に引退した。彼は息子たちよりも長生きし，長命で亡くなったので，壮大な葬式は孫やひ孫たちによってとり行われた。

ンバエ・タンブエの詩には，親族間の悲惨な戦争という青年期の体験が反映されており，戦争を嫌悪し，平和を求める政治思想が表現されているとされる（Ben Ali 1984)。特に，19世紀初頭の創作とされるンバエ・タンブエの代表作であり，99行の詩句からなる長い詩である「ポホリ」(Pohori）[3]が書かれた背景には，息子たちの対立をおさめようとする調停者としての父親の思いがあったとされる。

ミツァミフリ領のスルタン，ムサフム・タンブエは，後継者がおらず王朝の危機にあったンブワンク領から，スルタンの「ムナ・シェヒ」(Mna Shehi）を追い出して，領土を併合した。これに対し，ヒニャ・フワンバヤ氏族の王子たちは驚き，対応について相談した。そうした状況において，ンバジニのスルタンであり，ムサフム・タンブエの兄であるスジャウマ・タンブエは，ある時は同盟者として，ある時は敵対者として功妙にふるまった。ポホリの詩には，兄の「大きいノホワ」(Nohowa Mhuu）と弟の「小さいノホワ」(Nohowa Mtutu）という兄弟の漁師が登場してくるが，兄

[1] 両氏族の争いは，19世紀に，ヒニャ・マツワ・ピルサ氏族のバンバオ領のスルタンである「サイード・アリ」(Said Ali）が，フランスの援助を受け，ヒニャ・フワンバヤ氏族のイツァンドラのスルタンであり，ンティベであった「ムサフム」(Msafoumou）に勝利し，ンティベの地位に就くまで続いた。その後，19世紀半ば以降，フランスによって植民地化されたコモロではスルタン制が廃止された。

[2] 母系氏族であるため，息子たちは自分の母親の氏族に属することになる。

[3] ポホリは，コモロの結婚式において披露される，花婿花嫁のヒニャを称える伝統的な演説「シンドゥワンツィ」(shinduwantsi）や，政治に対する批判的言説においてよく引用されたりする。

ノホワがスジャウマ・タンブエ，弟ノホワがムサフム・タンブエを表しており，兄ノホワが，弟ノホワに対し，その無謀さや，厚かましさを非難する語りが展開されていると解釈されている（Damir 1984）

以下では，詩集≪MBAYE TRAMBWE≫に収められたSIYASA/LA POLITIQUE（政治）の章の4つの詩を訳出する。コモロ語・ンガジジャ島方言[1]によるテキスト，フランス語による翻訳，日本語による翻訳の順で表記する[2]。脚注はBen Ali & Chami Allaoui（1990）の注を一部修正して翻訳したものであり，それに加えて，筆者による訳注を付けている。

翻訳は，Ben Ali & Chami Allaoui（1990）の仏語訳を参考にしながら，筆者とともにコモロ文化の調査に長年携わってきたコモロ人のAbdou Bacar Said氏の協力により，できるだけコモロ語・ンガジジャ島方言の表現による意味をくみ取るよう努め，現代語による翻訳を行った。

しかし，ンバエ・タンブエの詩は寓意や象徴に満ちており，しばしば，その隠喩的表現の解釈はきわめて難解とされている。ンバエ・タンブエの言葉は，たびたび公的な場での演説において引用されることも多いが，一般のコモロ人はその意味を明確に語ることができないことも少なくない。ンバエ・タンブエの言葉は，人々にさまざまな解釈を要求する賢者による「謎」として投げかけられ，聴き手の内に多様な意味を生み出すのだ。そのため，本稿は，筆者による一つの解釈として示す試訳でしかないが，コモロの社会や文化を理解する上で，ンバエ・タンブエの言葉は重要な基本的資料であるため，拙訳を承知で翻訳を試みたい。

[1] コモロ語（shikomori）には各島の方言があり，ンガジジャ島方言はその一つである。
[2] コモロ語のテキストおよびフランス語訳は，Damir & Masséande（1990）の表記をそのまま使用している。

NDUDJU ／ LE DAUPHIN ／ クジラ[1]

1. Ye Ndudju hwamba ye hupvo nvuwu tsi fumbu
2. Ye hwamba maludja tsinde ya hura wewu
3. Ye hwamba ma pvasi kadja hurandiya bamba
4. Ngwe ngalidjo hupwa santsa lihumidze
5. Watsohozi wadzube wa livube

1. As–tu dis Dauphin, que tu ne puises pas tes forces de l'eau de mer ?
2. As–tu dis que tu ignores la lumière réfléchie par les vagues ?
3. As–tu dis que les falaises ne te servent pas d'abri ?
4. Alors la mer se retirera et t'abandonnera sur le platier
5. Et les poseuses de nasses accourront pour te capturer

1. クジラよ，おまえに力をあたえるのは海の水でないと言うのか？
2. おまえを白く輝かせるのは波でないと言うのか？
3. おまえは，断崖が守ってくれないと言うのか？
4. ならば，潮は引き，おまえを浜辺に置き去りにするだろう
5. そして，おまえを捕まえようとする者たちが籠をもって駆けつけるだろう

[1] 訳注：この詩は，大きな権力をもつ者とその庇護を受けながら感謝しようとしない者が受けるであろう罰を，クジラと海の関係に喩えて寓意的に詠んだ詩だと思われる。

UTSENDE MALE ／ NE TE RENDS PAS A MALE ／ マレに行くなかれ[1]

1. Wutsendozina Mindradu bo Simama
2. Wutsende le bora la Male lushawishi
3. Hudjo rwara wurango hureleha
4. Yewe hudja ha mandza na magunguno ?
5. Hawu we utsaha ngalawa ya vumba yupvahiza ?
6. Mwana m'Bangwa
7. Ye wuzina Ndrude na Hantsindzi
8. Hawu Shezani mdji wa wususuni

1. Ne te rends pas à Mindradu oh Simama
2. N'y vas pas le bora de Male t'envoûtera
3. Tu risques de marcher sur une courge et de glisser
4. Reviendrais tu en te traînant sur les paumes et sur les genoux
5. Ou prendras–tu une pirogue puante.
6. Un enfant de Bangwa
7. Danse à Ndrude et à Hantsindzi
8. Ou bien à Shezani ville des plaisirs.

1. ミンダドゥ[2]に踊りに行くなかれ，お～，シママ[3]よ
2. おまえに呪いをかけるマレ[4]のボラ[5]を見に行くなかれ
3. おまえはカボチャ[6]の上を歩いて，足をすべらせるだろう
4. 手のひらと膝をついて，這ってもどってくるのか？
5. それとも，おまえは魚臭いカヌーに乗ってくるというのか？
6. バングワの子よ
7. ンドゥデで，ハンツィンズィ[7]で
8. あるいは，歓楽の町シェザニで踊るがよい

---

[1] 訳注：この詩は，シママという女性にンバジニ領に行くことを戒める内容により，息子のムサフム・タンブエに対し，ンバジニ領の謀略に対する注意を促し，自分の土地にいるのが安心だと忠告するための寓意的な意味をもつものと思われる。
[2] 訳注：「ミンダドゥ」(Mindradu）は，ンバジニ領の村。
[3] 訳注：「シママ」(Shimama）は女性の名前だと思われる。
[4] 訳注：「マレ」(Male）は，ンバジニ領の首都。
[5] Bora（ボラ）は女性による歌とダンス。ここでは，ンバエ・タンブエの息子であり，ミツァミフリ領とンブワンクゥ領の若きスルタンである「ムサフム・タンブエ」に呪いをかけようとする，マレの名高い呪術師の行為について述べられている。
[6] カボチャ（Courge=Urango）は，昔マレの地域で家の庭に垣根として植えられていた。その土地では余所者である若きスルタンが逃げようとすると，そのつるに足をとられて捕らえられる危険性があるということが表現されている。
[7] 「バングァ」(Bangwa)，「ンドゥデ」(Ndrude)，「シェザニ」(Shezani)，「ハンツィンズィ」(Hantsindzi）は，いずれも息子のムサフム・タンブエのスルタン領にある村。

MNA NOHOWA ／ LE PETIT NOHOWA ／ 小さいノホワ[1]

1. Yenge mna Nohowa hundjilwa
2. Ndjwamba wurudiye Ntsorale
3. Wende pvo Mnasindaweni wa ndjiye
4. Ba ye anlama ya Befuni yo ndziro
5. Ba tsi yiwono yiwuwa Msankasi
6. Yipvoho Mna Nohowa ze misi

1. Petit Nohowa si tu pourrais être compréhensif
2. Je te dirais de ne pas dépasser Ntsorale
3. De te rendre à Mnasindaweni pour te réfugier
4. Car les lieux de pêche au large de Befuni sont périlleux
5. J'ai vu en ce lieu périr Msankasi
6. J'ai vu un jeune Nohowa y perdre ses lignes

1. 小さいノホワ[2]よ，おまえは，わかってくれるだろうか？
2. おまえに言おう，ンツォラレ[3]を越えてはいけない
3. 避難するならムナシンダウェニ[4]に行くのだ
4. ベフニ[5]の沖の漁場は危険なのだ
5. そこで，わたしは，ムサンカシ[6]が死ぬのを見たのだ
6. そこで，わたしは，小さいノホワが釣り糸を失くすのを見たのだ

[1] 訳注：この詩に出てくる，「小さいノホワ」は息子のムサフム・タンブエを示しており，息子に対し，ヒニャ・フワンバヤ氏族のイツァンドラ領の謀略に対する警戒を促す意味をもつと思われる。
[2] 「ノホワ」(Nohowa) は名高い漁師の名前。
[3] 訳注：「ンツォラレ」(Ntsorale) はワシリ領の村。
[4] 訳注：「ムナシンダウェニ」(Mnashindaweni) も村の名前だと思われる。
[5] 「ベフニ」(Befuni) は，「イツァンドラ・ムジニ」(Isandra–mdjini) の漁師の住区。
[6] 訳注：「ムサンカシ」(Msankasi) は，「櫂を持つ者」を意味し，コモロの昔話のジャンルの一つである「馬鹿者」(daba) についての昔話によく登場する人物名である。

POHORI ／ POHORI ／ ポホリ[1]

1. Ngamina huba ya mdro ruma
2. Sha wanashe wumenyeha ha djaruso
3. Yesa yarumwa wema ngwambo shari
4. Wa shari ngupvitso ndzia ya suluhu
5. Yadje nimrume Kingini–Mbwani
6. Pvobariza ha matra misi range
7. Wehenda huwahundru yapvo masiyadi
8. Huhundru ye maseha kwali mbewo
9. Makwereha ha wupvera na huwudza
10. Marenda mihono djongo la mwatrani
11. Handani takadimu nde salamu
12. Bahi we yira tsambe zindrwadji
13. Tosa wunsalimiye fungwa Gori
14. Wuneziye fungwa Djombwe ne mwananya
15. Wumwambiye wuka ha hwamba wema Djummadi
16. Djummadi mwinyi Mbambani na Hetsa
17. Wuyo nde mwinyi Katsuni na Ha–Ivuwa.
18. Pvodjana wowana Nohowa mhuwu
19. Wa Kori Mkingini–mbwani
20. Wadja wa nlawuliya riwangaza
21. Wadjapvanu rilihindru rino madji
22. Rili msi hahwendjeza ze hadisi
23. Nahwamba yeziko zisisihawo masihu
24. Ne mahalayo renga ze nfi za shambo
25. Nopvima ye madjakaya ya mbwani
26. Wandiso swifiyana ze anlama
27. Nwamba keli zatru hwenda mbwani
28. Ne keli rikingiyawo manene
29. Na wuswifu swifa za mayimba madji
30. Ze hadisi zivummwa ha wumani
31. Zila mzahani zidja wutunguni
32. –”Badi hunihadaya bo Dalambwani
33. ”Hundhili bo Mkaantsi–wuwango
34. ”Ye hutswamba kuna hwenda mbwani tsena
35. ”Ntso wuhundra na ngalawa na misi
36. ”Nlogora wesheyawo yezilowo

[1] 訳注：釣りに関して言い争いをする大きいノホワと小さいノホワという兄弟間の対立を描いたこの詩は，ンバエ・タンブエの息子たちの争いを戒める寓意的な意味をもつものと思われる。

37. ”No wupvo wuhupviyawo ye madji
38. Tsiyishiya ye mna Nohowa mtutu
39. Hemi ngurongowo hakitembe.
40. ”Tsabu Koni–nkoni ngo djumwe mlozi
41. ”Mafahaya yanu kayana mhuwu hamba
42. Wendo remana tsi waziyiya
43. Tsiluhu tsi kadimiya ye mhuwu
44. Tsambiya ye mwana yazidi maha
45. –”Kuneha kwiyi bo Msankansi
46. Ha yishiya tsi shewusha ye mwanashe
47. –”Kuntra hayani bo Dalambwani
48. ”Ba mafahaya yanu yapvwa mwanadamu
49. Hapandza hende hule pvabuha kitsele
50. Hando djibu hadisi hozambwa na wutungu
51. –”A hisa hindrini wunsimawo shaya
52. ”A ndazipvi ngazindrendo mbone
53. ”A tsamba unipve idzima ye zilowo
54. ”Awu ze misi ndrumiyawo za haho
55. ”No miye mna nkasi no wupvo ndjazima
56. ”Ye ngalawa tsitsindzi ha gharamahayo
57. ”Na wazidjuwa wana Ikoni Djabali
58. ”Na Befuni ko yadjo nivha gaba
59. ”Na Tsendza wandru wadjuwawo wulozi
60. ”Dimani huka mbamba ya hindza
61. ”Yika wutsindza mbamba hazibunda
62. ”Na hunguwa nfi za mbidi ho barini
63. ”Na wutsindza ye mihundana mihuwu
64. ”Rangu yanliya kedja liya
65. ”Nge tsungo hwepveya wuswa traya
66. ”Wena riziki sha tsi mlozi
67. ”Mlozi ndami ko tsiri vumbi
68. ”Miko tsiri dudja la masihu
69. ”Ko wadire wa nudza mbwani
70. ”Shiyingu ka randiha nguwo na rudi
71. ”Mi mdru wo pashiya tsando zina
72. ”Bahari ye zina tsende ndzahini
73. ”Vho zadja nkopveni tsizili shimo
74. ”Tsi paro rosa ntsode Ha–Mhali
75. ”Kudja numba kudja nunga misi
76. ”Kudjaka nkiyoni mwe djamaya
77. ”Sha hupviri we fumba miri dja Yesha

78. ”Notra buhuri dja malisada
79. ”We lenga ne ziko wamba uro
80. ”Nwamba Nohowa mwikoni harosa
81. ”Nowentsu walwa nfa djunga pambamadji
82. ”Welwa honyo huhuwu
83. ”Isho ndo sha pva rambo wetsi mlozi
84. ”Bahorosa no wupvuza tadjabiri
85. ”Hurwa nane madjandza yatsi koze
86. ”Neni ya wambiha ndrwiyi yewulwa kankatsi
87. ”Ya wambiha mbandzi tsolwa mbasi
88. ”Ye shi wuhomeso puzoni waswiya
89. ”Sha ebi hunu iyo isa wutsudjuwa
90. ”Ye mlozi ndami ko tsiri husi
91. ”Mi mdru ne wambisa tsi rubuza
92. ”She simiha shiharaya shoheya
93. ”Mi wura le pembo lendzo wuwango
94. ”Eka shiharaya sho djuha
95. ”Mi uhamisi ye faza ya mlozi
96. ”Tsisihi dja ntsidawe tsi shi ruhuwa
97. ”No nambe ni djuhe ne zilowo
98. ”Ni wambe ni heye na Ha–Ipvotri
99. ”Ne zinyanya za henda zidje piya.

1. J’ai grand besoin d’un commissionnaire
2. Mais les serviteurs altèrent les messages par leur pusillanimité.
3. Qui est chargé de sceller l’amitié crée la discorde.
4. Qui doit ouvrir un conflit oeuvre pour une réconciliation.
5. Je veux l’envoyer à Kingini–Mbwani,
6. Place des teinturiers de lignes de pêche.
7. A ton arrivée, si tu les trouves là ces seigneurs,
8. Ces braves qui ne se battent pas pour des faveurs,
9. Aux corps qui ondulent en enroulant et déroulant,
10. Aux bras courbés en arc comme le mwatrani
11. En premier lieu adresse–leur le salam.
12. Et par la suite, ne dis plus le contraire.
13. Salue et souhaite en mon nom la paix à Gori.
14. Présente mes salutations à Djombwe et à son frère ;
15. Dis lui qu’il a les amitiés de Djummadi.
16. Djummadi, maître de Mbambani et de Hetsa.
17. Celui qui est le maître de Katsuni et de Ha–Ivuwa
18. Hier les enfants de Nohowa, l’aîné

19. Fils de Gori, habitant de Kingini Mbwani
20. Sont venus me rendre visite et causer
21. Ils sont venus ici, nous avons mangé et bu,
22. Nous avons pris du tabac pour prolonger la conversation.
23. Parlant des ports d'où l'on peut sortir la nuit,
24. Des lieux où l'on prend des poissons pour l'appât.
25. Et évaluant les forces des courants
26. Ils ont vanté leurs lieux de pêche,
27. Parlé de leur habileté en haute mer,
28. De leur capacité à affronter les éléments déchaînés,
29. Et des grands poètes qui accompagnent la houle de leurs chants.
30. La conversation a tourné à la dispute.
31. Les propos d'abord grisants deviennent blessants.
32. –"Comme tu m'as trompé Passeur–des–nuits–en–mer !
33. –Tu m'as discrédité Croupier–sur–entretoise !
34. –Tu m'as déclaré que tu n'iras plus en mer ;
35. –Je te trouve en possession d'une pirogue et des lignes !
36. –Du chapeau dans lequel tu conserves les hameçons
37. –Et du récipient pour écoper l'eau !
38. J'ai entendu le petit Nohowa, le cadet
39. Se lever et parler d'une voix méprisante
40. –"C'est pourtant Nkoni nkoni qui fait le nom du pêcheur
41. –"Le prestige ne vient pas de ce que dit l'ainé.
42. Ils allaient en venir aux mains, je les ai empêchés
43. Je me suis adressé d'abord à l'aîné
44. J'ai parlé au plus avancé en âge
45. –"Préserveras–tu mon autorité, Porteur–de–pagaie !
46. Il m'a écouté, je me suis tourné vers le cadet
47. –"Gardes–tu du respect pour moi, Passeur–des–nuits –en–mer !
48. –Le prestige est un attribut de l'homme.
49. Il s'est écarté et un espace est laissé libre.
50. Il s'est mis à rétorquer d'une voix insolente :
51. –"Pour quelle raison me repousses–tu du doigt ?
52. –Qu'est ce qui fait de moi un infâme ?
53. –T'avais–je demandé de m'offrir un des hameçons ?
54. –Ou bien les lignes que j'utilise sont–elles à toi ?
55. –Moi, je n'ai pas emprunté la pagaie et l'écope.
56. –La pirogue, je l'ai creusé et payée à son prix.
57. –Ils le savent les enfants d'Ikoni Djabal
58. –Et ceux de Befuni qui ne me feraient pas cadeau d'un peu de gabe
59. –Et ceux de Tsendza, maîtres dans l'art de la pêche

60. –A Dimani, il y avait un squale dévastateur
61. –Il tuait des requins par bancs entiers
62. –Déchiquetait les gros poissons dans la mer
63. –Il massacrait les gros barracuda
64. –Du jour où il a mordu mon appât, il n’a plus mordu
65. –Il évite depuis, les abords des balanciers
66. –”Tu reçois des dons de la providence mais tu n’es pas pêcheur
67. –Le pêcheur c’est moi, car je ne crains pas les brisants
68. –Je n’ai pas peur de la houle, la nuit.
69. –Le temps, si mauvais soit–il,ne m’empêche pas de sortir.
70. –La nuée étendant son linge ne me fait pas reculer.
71. –Je suis à bord comme à la danse ;
72. –Et au rythme de la mer j’exécute le ndzahi
73. ”Quand les faits se sont présentés sous mes cils, je les ai jauges
74. –J’étais aux prises avec un ntsode à Ha–Mhali.
75. –Tu ne m’as pas assisté, tu ne m’as pas offert une ligne.
76. –Tu n’as pas joint tes encouragements à ceux de la communauté.
77. –Tu as erré, collectant des bouts de bois comme Yescha.
78. –Brûlant l’encens comme les charlatans,
79. –Passant sur les ports en criant : c’est ferré !
80. –Et encore Nohowa d’Ikoni a ferré !
81. –”Le grand poisson que tu as capturé est le pambamadji
82. –La pêche d’un honyo est pour toi un grand exploit.
83. –C’est ce qui nous a amené à dire que tu n’es pas un pêcheur :
84. –Car ferrer et tirer est une science,
85. –Et lancer la ligne sans te blesser les paumes.
86. Or qui a appâté par des bigorneaux prend un kankatsi
87. Qui a appâté par un poisson volant pêche un thon.
88. Ta lenteur est due à tant de conseils reçus ;
89. Mais les appels au secours ne sont lancés que par le novice
90. Le pêcheur c’est moi, car je ne crains pas l’alizé du sud.
91. Je ne casse jamais une ligne coincée.
92. Si l’hameçon s’accroche et ne remonte pas,
93. Je plonge la perche munie d’uwango,
94. Si je ne parviens pas à le remonter,
95. Je mets de côté la prudence du pêcheur,
96. Je plonge comme un galet et je l’extrais.
97. Je lutte pour revenir avec tous les hameçons.
98. Je lutte pour remonter à Haïpvotri,
99. Pour ramener la totalité de la grosse ligne de fond.

1.使者を送らんとす
2.だが，使者は臆病ゆえに役に立たず
3.友好を結ぶための使者が不和をもたらし
4.争いを起こさんとする使者が和解への道をひらく
5.わたしは，キンギニ・ンブァニ[1]に使者を送りたいのだ
6.そこには，釣り糸の染色場がある
7.到着し，領主たちを見つけたら
8.彼ら勇者は好意的で，争うことのない者たちだ
9.彼らは，身体を折り曲げ
10.ムワタニ[2]の櫂のように腕を曲げ，祈りを捧げる[3]
11.まず，彼らにサラーム[4]とあいさつし
12.そうしたら，もう逆らうことを言うではない
13.あいさつし，わたしの名でゴリ[5]の平和を祈りなさい
14.ジョンブウェ[6]とその兄弟に，わたしのあいさつを伝えなさい
15.彼に，ジュンマディ[7]の友好を伝えるのだ
16.ジュンマディは，ンバンバニとヘツァ[8]の長であり
17.カツニとハ・イヴワ[9]の長である
18.昨日，大きいノホワ[10]たちが
19.キンギニ・ンブァニ[11]のゴリの息子たちが
20.わたしを訪ねて来て，歓談した
21.われらは食べて，飲み
22.話をはずませるために煙草を嗜んだ
23.そして，夜の海に出るための港について
24.餌にするための魚を捕る場所について
25.潮流の速さについて語り合った
26.彼らは自分たちの漁場を自慢し
27.海原を進む巧みさや
28.荒々しい海に立ち向かう能力
29.そして，波のうねりに歌をあわせる偉大な詩人たちについて話をした
30.会話は口論へと
31.冗談から辛辣さへと変わった

---

[1] ワシリ領の首都「クァンバニ」(Kwambani）に近い，ンガジジャ島東部の「イツィンクディ」(Itsinkudi）の地区。
[2] 「ムワタニ」(mwatrani）は，カヌーの櫂の材料となる非常に堅い木。
[3] 訳注：イスラームの礼拝の動作を示しており，ムスリムであることを指すと思われる。
[4] 訳注：「サラーム（salam，平安あれ)」はコモロ語でのあいさつの言葉。
[5] 訳注：「ゴリ」(Gori）は，キンギニ・ンブァニの氏族＝ワシリ領のンバエ・タンブエの氏族または領地を表すものと思われる。
[6] 訳注：「ジョンブウェ」(Djombwe）は男性の名前。
[7] 訳注：「ジュンマディ」(Djummadi）は男性の名前。語り手自身を表していると思われる。
[8] 「ンバンバニ」(Mbambani）と「ヘツァ」(Hetsa）は，父親のスルタンであるムラナウによりバンバオ領に併合されたハンブ領の村。
[9] ンブワンクゥ領にあった，現在は放棄された小集落。
[10] 「大きいノホワ」は，ゴリの息子の長男であり，ンバエ・タンブエ自身の息子を示している。
[11] ここでのキンギニ・ンブァニはワシリ領全体を示している。

32.[1]「おまえはわたしをだましたのだ，夜の海の船頭よ！
33.おまえがわたしを馬鹿にしたのだ，釣りの重りを沈める者よ！[2]
34.もう海に行かないとわたしに言ったのに
35.おまえがカヌーと釣り糸をもっているのをわたしは見たぞ！
36.釣り針を刺した帽子や
37.船の水を汲み出す容器ももっていた！」
38.わたしは，弟の小さいノホワが
39.立ち上がり，さげすんだ声で言うのを聞いた
40.[3]「だが，漁師として名を上げたのはンコニ・ンコニ[4]の海のおかげでないのか？
41.漁師の名声は，大きいノホワ（兄）が言うようなことで得られたものではない」
42.彼らが争いをはじめたので，わたしは止めた。
43.わたしは，まず大きいノホワに話しかけた
44.より年齢が上の者に言ったのだ
45.「わたしを敬え，櫂をもつものよ！」
46.彼が言うことを聞いたので，次に，わたしは小さいノホワの方を向いた
47.「わたしを敬え，夜の海の船頭よ！
48.人とは恥を知るものだ」
49.彼は無視し，慎みなく
50.無礼な声で反論しはじめた
51.[5]「なぜ，あなたはわたしを非難するのです？
52.なぜ，あなたはわたしを嫌うのですか？
53.釣り針を一つくれるよう，あなたに頼みましたか？
54.それとも，わたしの使う釣り糸があなたのものだと言うのですか？
55.わたしは，あなたから櫂も水汲み容器も借りたことなどありません
56.カヌーも，わたしがお金を出して，削り出したものです
57.イコニ・ジャバル村の子たち，彼らはそれを知っている
58.少しの噛みタバコ[6]さえ土産に持ってこないイツァミア・ベフニ村の者たち，
59.そして，イコニのツェンザ[7]に集う者たち，釣りの名人たちも，それを知っている
60.ディマニには，悪さをする一匹のサメがいて
61.そいつは群れのサメを殺し
62.大きな魚を海の中でばらばらにし
63.バラクーダも殺した
64.やつがわたしの餌に食いついた日以来，もうやつは別の餌に食いつくことはない
65.それ以来，やつは逃げ出したのだ」

---

[1] 訳注：以下の発言は，大きいノホワ（兄）によるものと思われる。
[2] 訳注：「夜の海の船頭」（Dalambwani）や「釣りの重りを沈める者」（Mkaantsi–wuwango）という表現は「漁師」を表しているものと思われる。
[3] 訳注：以下の発言は，小さいノホワ（弟）によるものと思われる。
[4] 「ンコニ・ンコニ」（Nkoni–nkoni）は，ンバジニ領の沿岸の漁場。
[5] 訳注：以下の発言は，小さいノホワ（弟）によるものと思われる。
[6] 「ガバ」（Gaba）は噛みタバコ。訳注：タバコの葉を粉にしたものを唇の裏に入れたり，鼻から吸ったりして楽しむ嗜好品。
[7] 「ツェンザ」（Tsendza）は，イコニにある漁師たちが集う場所。

66.[1]「おまえは幸運だっただけだ。おまえは漁師ではない
67.漁師はわたしだ。なぜなら，わたしは砕け散る波を恐れないし
68.夜の波も恐れはしない
69.天候が悪くても，海に出ることをためらわないし
70.厚い雲がすそを広げても，しり込みすることはない
71.わたしはダンスするように船に乗り
72.海のリズムで，ンザヒ[2]を踊るのだ」
73.[3]「さまざまな事を見て，わたしは納得した
74.わたしは，ハ・ムハリ[4]漁場でサメ[5]と闘った
75.おまえは，わたしを助けようとせず，一本の釣り糸もくれなかった
76.おまえは，村の者たちの激励に加わろうともしなかった
77.おまえは，呪術師イェシャ[6]のように，木切れを集めながらさまよい
78.偽医者のようにお香を焚き
79.『捕ったぞ！』と叫びながら港に行くのだ
80.『イコニのノホワが，捕ったぞ！』と叫ぶのだ」
81.[7]「おまえが捕まえた大きな魚はメジロザメ[8]だ
82.小さな魚[9]でも，おまえにとっては大手柄だ
83.だから，おまえは漁師ではないと言うのだ
84.魚のあたりをつけ，釣りあげること
85.手の平を傷つけずに，釣り糸を投げ入れるのが技なのだ」
86.[10]「小さなタマキビ貝を餌にする者は，小さなオトメベラ[11]しか釣れない
87.トビウオを餌にする者は，マグロを釣り上げる
88.おまえが愚鈍なのは，教えを受けていないからだ
89.だが，おまえに教えてやろう
90.わたしこそ漁師だ。なぜなら，わたしはクシ[12]の南風を恐れない
91.わたしは決して引っかかった糸を切ったりしない
92.もし，釣り針が引っかかり，あげられなくなったら

---

[1] 訳注：以下の発言は，大きいノホワ（兄）による発言と思われる。
[2] 「ンザヒ」(Ndzahi）は，王の兵士による「イグァドゥ」(Igwadu）という伝統的ダンスの，美しく，アクロバティックな踊り。
[3] 訳注：以下の発言は小さいノホワ（弟）によるものと思われる。
[4] 「ハ・ムハリ」(Ha–Mhali）は，「ショモニ」(Shomoni）村の沿岸の漁場。
[5] 「ンツォデ」(Ntsode）はサメの一種。
[6] 「イェシャ」(Yesha）は，ンバエ・タンブエの時代の有名な呪術師の名前。ノホワ兄弟とエシャは，コモロの伝統的演劇に登場するキャラクターである。
[7] 訳注：以下の発言は大きいノホワ（兄）によるものと思われる。
[8] 「パンバマジ」(Pambamadji）はサメの一種。
[9] 「ホニョ」(Honyo）は小魚一般を指す。
[10] 訳注：以下の発言は，語り手＝ンバエ・タンブエ自身によるもので，小さいノホワ（弟）を戒める内容だと思われる。
[11] 「カンカツィ」(Kankatsi）はオトメベラという種の魚。
[12] 訳注：「クシ」(kusi）は６～９月にかけての乾季に吹く，南東の風。

93. わたしは重り石[1]を沈める
94. もし，釣り針をあげることができなかったら
95. わたしは漁師の慎重さを忘れ
96. 小石のように海に潜り，それを引き抜くだろう
97. わたしは，釣り針をすべてもち帰るのだ
98. わたしは，巨大な魚[2]を捕え
99. 海の底に沈むたくさんの釣り糸をすべてもち帰るのだ」[3]

[1] 「ウワンゴ」(Uwango) は，釣りの仕掛けの一つであり，穴を空けた石に釣り糸を通したもので，釣り糸を海の底に沈める。小刻みに石を引っ張って，珊瑚礁に引っかかった釣り針をはずしたりする。訳注：「ペンボ」(pembo) と同義語。
[2] 「ハイヴォティ」(Hayipvotri) は巨大な魚の一種。
[3] この最後の発言部分は，語り手＝ンバエ・タンブエ自身が小さいノホワ（弟）を戒める語りだと思われる。

参考文献

Bacar, Abdoulatuf. (2011). Le poète Mbaé Trambwé.(http : //histoirescomores.canalblog.com/archives/2011/03/19/20670008.html, 2019年 9 月13日閲覧)

Ben Ali, Damir. 1984. Pohori, Poème de Mbaye Trambwe. Ya Mkobe, No.2 : 39–49. CNDRS.

Ben Ali, Damir. & Boulinier, Georges. & Ottino, Paul. (1985). Traditions d'une lignée royale des Comores. L'Harmattan.

Ben Ali, Damir. & Chami Allaoui, Masséande (rédaction et traduction). (1990). MBAYE TRAMBWE : Poèmes, pensées et fragments. CNDRS.

Blanchy, Sophie. 2003. Seul ou tous ensemble ? : Dynamique des classes d'âge dans les cités de l'île de Ngazidja, Comores. L'Homme, No.167–168 : 153–186.

Elbadawi, Soeuf. (2002). Mbaye Trambwe. Africultures, No.51 : 50. L'Harmattan.

Elhad, Mab. La poésie comorienne dans sa diversité.(http : //poetes–de–la–lune.over–blog.com/pages/La_poesie_comorienne_dans_sa_diversite–409117.html 2019年 9 月13日閲覧)

Said Ahmed, Moussa. (2000). Guerriers, princes et poètes aux Comores. L'Harmattan.

Walker, Iain. (2019). Islands in a Cosmopolitan Sea : A History of the Comoros. HURST.